

風景畫をかく土臺として稽古する場合には、この物質の研究は飽く迄やらねばならぬ。

△バックと同じく、モデルを置く床の色も、また大切である、多くはバックの布を其儘長く折り曲げて下敷とするのであるが、色の配合上、他の布を持つて來ることもあり、また時として、机其まゝ又は疊へデカに置くこともある。物によつては糸ダテとか蕙とかの類がよい場合もある。

△床の色も、バックと同様に、モデルよりも強く目を惹くものは避けたい、判然した模様のあるものもあまり用ひぬ方がよい、絲ダテや蕙や、又は疊の上に置いた時、其床の疊の目など、あまり細かく畫いてはいけない、極大タイの調子を見て、趣だけ出すやうにする。

△バックと床との境目は、あまり明らかに筋が見えてはいけない、また床は、平面といふ感じを出すやうに工風されたい、此心持を忘れると床が直立してゐるやうに見える。

△床の布を前へ垂らした時は、其形に注意して、あまり單調でないやうにしたい、時としては一ニヶ所皺を作るのもよい、また布の折目をことさらに見せるのもよい、そして前の垂れた處の線は、水平でなく、少し斜めになるやうに位置を作る方が面白い。

△狭い床の上に、あまり澤山物を載せてはいけない、見る人に窮屈や不安の感を與へてはいけない。

### 談 片

隅から隅迄繪具や筆が行渡つて畫いてあるものを繪では無いやうに言ふ人もある。繪は必ずしも筆や繪具が畫面に萬遍なく着いてゐなくともよからうが、着いて居てもよい。繪はどういふものだと狭い範圍に極めてしまいたくない。靜物畫も叮嚀に實物を見るやうに畫いてあるものもあるし、圓い林檎を四角に畫いてあるものもある、どちらが悪いとか佳いかいふのは其時代と見る人々の考だ、二に二を加へて四になるといふやうなものではない。